
麗しき心ない世界

由杏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

麗しき心ない世界

【Nコード】

N2831T

【作者名】

由吉

【あらすじ】

高校生と小学生の兄妹が迷い込んだのは剣と魔法が織り成す決して綺麗ではない世界。

人が支配し支配される醜い世界。その世界に兄妹は救世主として認められる存在になる。兄妹は元の現代に戻ることはできるのか。異世界現代人召喚ファンタジーの幕開けでございます。

1・救世主兄妹召喚

「救世主様」

荒々しい声が乱れる中で透き通る美しい音色の鈴のような声を目の前の女の子は言った。

凜々しく、しかし可憐さも残す容姿。銀色で包まれた軽装の剣士風。それで両手には長さの異なる刀を持っている。

空には矢が飛び交い、地では炎が木々を焼き払う。鉄と鉄の交差音があちこちから響き渡る。

何が起きているか理解できず思考は停止して茫然と立ち尽くす。左手に握っている妹の小さな手がぎゅっと強く握り返してくる。

それに気付いたナギは小学生の妹のナミに視線を移すと表情は恐怖で怯えていた。その恐怖は震えと共にナギの手に伝わる。

「にい、ここどこ？」

今にも泣き出しそうな妹になんと云えばいいのだろうか。いや、それも大事だけど目の前の女の子は誰だ。その物騒な格好はなにかのコスプレなのか。

あと周りの雄叫びやら爆発音はなんだ。サバゲーでもやっているのか。

疑問しか残らない理解に苦しむ状況だ。

「救世主様。我らに力をお貸しください」

ガチャガチャと鎧の音をさせながら女の子は片膝をついて言った。

ああ、救世主様って俺達のことですか。ええと、これは芝居かそれとも新番組のドッキリ企画とかなんかなのかな。

「にい、この人誰？」

「さあ？ あの、いったいここは」

それを聞いた女の子はぱつと顔を上げる。

「大変失礼しました。名乗り遅れました。私はアルハイム国將軍を任されているアイナと申します」

「私はナミって言うの」

妹は状況を余り理解できていない部分もあつて自分も自己紹介していた。

頭がこんがらがっている俺の手をぐいぐいと引っ張って、にいも自己紹介しろというアイコンタクトを強烈に送ってきていた。

「俺はナギ。こいつの兄です」

「やはり、そうでしたか！！ 伝承は虚実ではなかった。これで我々に勝利が！！」

アイナという娘は片手に携えていた長刀を空へと掲げ叫ぶと、それに呼応して周りから轟音となった声の集団が大地を揺るがす。

金属音と爆発音、風を切る矢音は鋭さを増していく。

ここはどこだ？

世界が一つではないと学者が言っていた。パラレルワールドとか異世界とかそんなファンタジーが存在する可能性はあると。

可能性とするならばそんなこと誰にでも考える事ができる。問題は可能性を見出した先にある。

その可能性が否定できないならばそれは実現可能である。存在するものを証明するのは簡単だ、目の前のそれがその証明になるのだから。しかし存在がわからないものを存在しないという証明はできない。

この世に存在しないものなんてない。ただ発見されていないだけなのだ。

今まで空想上の架空の世界として無限の世界が紡がれていたその世界の断片の一つである世界に來ただけの話である。

俺達のいる世界も誰かに作られた存在なのだ。それはあまりにも儂く脆い夢伽の世界。

何が本当の世界で何が嘘の世界でなんか問題ではない。

俺達が存在するこの世界こそが本物であるのだから。

誰かが妄想して虚言として作った世界にもそこに住人はいる。

俺も妹もファンタジーの世界が大好きだ。そこにはお姫様がいて王子様がいて英雄に悪党様々な人がいる世界。

それは夢の世界だった。

それは本当の世界だった。

俺は哲学とかそういう可能性とかIfの話が好きで暇があれば考えていた。ただ可能性の一部であるもしもの世界のことを。

正義とはなんだ、とか。善と偽善の境界線はなんだとか。そんな

ことは誰にも理解できないと感じていてもやはり好きだから考える。くだらない話で盛り上がるように。

実際それが現実として起こるはずがないと思っただけの可能性の一部だった。

しかしそれでも可能性。

完全否定できないのならそれは現実に起こる。

俺こと七代永義ななしろ なぎは高校三年。大学受験も無事終わってのんびりと過ごしていた。正直なにも才能がない平凡極まる人間だ。悲しきかな、我が人生。

妹の永美なみは小学6年生。こいつの適応能力は異常だと言っしかない。人懐っこく誰とでもすぐに打ち解ける。言葉が通じない外人でもあっても外国であつてもだ。それに俺よりもっさりしていると散々両親に言われていた。

俺達七代兄妹は異世界という現実に飛ばされてしまった。

何故どうしてここに飛ばされたのかはよくわからない。今日は両親が出掛けていて俺が妹の世話をすることになっていた。妹よりも早く終わる予定だったので小学校の前にて待機その後妹と合流。ここまではただの日常。

家までの帰路を学校であつたことを妹がマシンガントークのように話してくるので相槌を打っていた時だった。

まるでドラマとかである車に轢かれる時にフラッシュライトで照らされるような光が俺達を包んだ。

そして飛ばされた先はどっかの戦場のど真ん中。

もう立ち尽くしかない。何すればいいかわからない。逃げたくても歩行ってという行動を完全に忘れてしまった体が茫然と地面に根っ

こを生やした感覚。

妹は何を考えているか分からない。恐がって震えているのか武者ぶるいで震えているのかも分からないや。

我が妹はキヨロキヨロと周りを見回す余裕がたつぷりとある様子。何度もぐいぐいと握った手を引つ張る。

目の前に現れた可憐な女の子アイナが俺達兄妹を救世主と呼び、俺は大混乱。妹は余裕の自己紹介。

俺達はこれからどうなるのだろうか。

この世界が夢でありますように。

馬車に揺られ夢から覚める。

横を見るとナミが窓から子犬のように外を眺めていた。外は平原が広がる大地。空は雲がかかり陽は黄金のように輝き山に沈む途中だった。

荒れた道をガタガタと上下左右に壊れた揺り籠のように乱暴に進む馬車の中で溜息をつきながら夢ではなかったと落胆する。

「救世主様。この度は我らにお力をお貸しくださりありがとうございます」

「にい、起きたんだ」

目の前に座っている銀の女剣士アイナと窓の外を眺めていた妹のナミがこちらを見ながら言う。

引き攣った顔でははは、と作り笑顔で返すしかなかった。夢ではない現実を俺は信じる事ができないままだ。

あの戦場に俺達兄妹が現れてただ突っ立っていたただけだが偶然にも風向きが変わり戦況は一変しアイナの号令によって士気がウナギ登りの如く急上昇。あっという間に勝利を手にしたのだった。

ただの偶然。俺達が現れなくても風は吹いただろうし戦にも勝利していただろう。それなのにこの娘とその他大勢の兵士は俺と妹を救世主だのなんだので崇められることになった。

困惑する俺を傍目にナミは持ち前の適応能力を発揮していた。

「それでどこに行くんですか？」

「我がアルハイム国城に向かつております。そこで此度の救世主

様の祝勝会をさせていただきます」

「たくさん料理とか出るんだって。楽しみだね」

「はい、もちろんです」

「そう・・・か」

頭が痛い。この状況に対応しきれない俺がおかしいのか。

その後は妹がアイナに途切れない質問を繰り返していた。重要なことを聞いていたが俺の耳には入って来なかった。

受け入れられない現実も存在するというのが俺には理解できない。それを現実逃避というのだが限度っていうものがある。

今回の事象はその限度の臨界点を越えている。余りにも理不尽で人知の範疇を超えているのだ。

人間は自分の理解の外に出ると体が硬直しそれから目を反らすというのが自分自身の体験ということであった。それとその時は思考も止まり自分ではなにも行動ができなくなることもわかった。

頭が一向に冷えない。オーバーヒートしても尚エンジンが止まらない感じ。もう確実に再起不能になりそうだ。

「これが我らのアルハイム城です」

「わあ！！ にい、見てすごいよ。お城だ！！」

周りの風景は平原ではなく街中になっていた。

ナミの驚嘆につられ馬車の窓から顔を出す。巨大な城壁と山に囲まれた城がそびえていた。

「すごい」

思わずぼつりと出る言葉。妹はキャーキャー嬉しそうに言う。

ギギギギと巨大な城門が開かれ馬車は入っていく。

空の色は茜色から暗闇に表情を変える。星が瞬き月はこの世界でも変わらず大地を照らしていた。

馬車が止まり、扉が開いた。

「アイナ將軍無事でなによりです」

若い兵士がアイナの手を取り下ろす。

「この方たちが救世主様だ。無礼の無いように丁重にもてなしをし
る」

「はっ！！ 救世主様どうぞこちらへ」

「ありがとう」

ナミはお姫様のように兵士の手を取って下りた。流石だよ、どんなことにも怖じ気ない尊敬に値する我が妹よ。

俺は無言で馬車から下りる。

目の前に広がるのは巨大な城。テレビや本で見たことはあったがこれ程までの存在感と圧倒される迫力には感動をする。これが違う場所ならもつと感動ができたはずだけれど。

兵士達が石造りの道の両端にズラツと並んでいる。これはテレビでヤクザが親分を待ち構えている風景にそっくりだ。違うのは皆ス
ーツではなく鎧に身を包んでいることだ。ものすごい威圧感。

妹は楽しそうにくるくる回るようにあちこちを見ながら笑っている。俺にもこんな余裕が欲しいよ。

城の中は思ったよりも豪華とはいえない見た目だった。俺の予想ではレッドカーペットが敷いてあって、壁には絵画や華やかな装飾が施されていて天井には煌びやかなシャンデリアが明かりを灯しているというのだったが。

この城にはそういうのはあるのだが少ない。理想と現実の違いと
いうのか、少しガツカリもした。

「救世主様、まず我がアルハイム国王に謁見されることを了承して
もらいたいです」

「いいよー」

おい、軽すぎるぞ妹よ。でもまあ、いいか。

考えてみれば俺達はこのこと何も知らないし。さっきナミがア
イナに聞いていたけど頭の中の整理ができていなかったから全く俺
は聞いていなかった。

「俺もいいよ」

「ありがとうございます。王は既に謁見の間にてお待ちされていま
す」

王か。王って良いイメージってないんだよな。

できればどうか王がこの世の善という人でありますようにと願う
しかない。反感買って斬首刑っていう悲劇を招かれないようにした
い。

白いドラゴンが装飾された扉が兵士二人によって開かれる。ゆっ
くりと重量感のある扉は謁見の間への道を作った。

奥に鎮座する玉座に座るのはこのアルハイム国に君臨する若き王だと妹が耳打ちをしてきた。ついでに「無礼がないように」と。お前は俺の保護者か、とツツコミを入れたくなった。

アイナが先頭を切って王の玉座の手前で片膝をついた。

「ただ今戻りました。今回の戦にて絶望的と思われた戦況を救世主様に救われました」

俺たちは何もしていないのに話が肥大化しているよ。アイナが次々と付け足していく救世主様の捏造話で俺の顔はどんどん青ざめていく。

ナミは呑気に「私たちすごいんだね」と目を輝かせながら言う。違うぞ妹よ。

こういう風に子供はありもしない幻想の夢とキボーを培っていくんだな。テレビとかの洗脳教育よりも実際に目の前でやられるのが恐ろしい。

王も椅子から前のめりで興奮しながらアイナの脳内想像夢物語を熱心に聞いていた。王様、あんた騙されているよ。

「そうか、救世主殿、貴殿の口から訊きたい。よいか？」

「へっ、はい」

「漆黒の青年と純白の少女が救世主として現れる。という伝承が我が土地には残っているのだ。救世主殿の召物はまったくその通りそのもので、その召物は見たこともない代物だ」

なんとという悪魔の仕業のような偶然だ。王様の言うとおり俺は漆黒の召物である学ラン姿。妹は純白のワンピース。

その伝承は今作ったものじゃないだろうな。仕組まれているとは思えない。

「私のこれはまるきゅーって所で買ってもらったの」

「ほほう、まるきゅーとは？」

おい、王様に無礼すぎる口の聞き方だな。それで口がなっていないと王様が怒りだすのではないかと冷や冷やしたぞ、妹よ。

それに王様も食いつくな。ナミは渋谷にある数字が名前の店のことを語り始めた。

王様も興味津津で楽しそうに子供のように訊いている。

「そうか、そのような商店が貴殿の国ではあるのか。我もトーキョーという国に行ってみたい」

俺も東京に帰りたい。それに王様がこっちの世界に来たら俺以上にパニックになるか妹以上にはっちゃんけるかのどっちかだろうなあ。王様の隣で立っていた男。たしか自己紹介で軍師のヴァッシュとが言っていた。その男が王様に耳打ちをする。

「ふむ、救世主殿に今宵宴を急遽手配した。その時にまた楽しき時間を過ごそう。では、宴で会おう」

王様は玉座から立ち上がり舞台袖に消えていった。
アイナも兵士に耳打ちをされていた。

「救世主様、宴まで時間がありますのでお部屋を用意いたしましたのでこちらへ」

俺達兄妹はアイナの後ろについていく。そう、ついて行くことし

かできない。

俺達はこの夢物語の世界を何も知らないので行動が自由にできない。

ただ今は頼るしかない。

それに順調な事の進み方に違和感がある。俺達はなにかのドッキリかテレビ番組のモニターにされているのではないか。俺はこれが嘘でした、とかドッキリ成功、とかそういうのを期待しているがそれにしても出来過ぎている。

嘘であってほしいのだ。

もしこれが俺一人だけだったらこれほどまで落ち着いていなかっただろう。妹がいるおかげで今俺が狂気錯乱状態にならずにすんでいる。

妹の前では兄だから、兄が不安でいたら妹も不安になるから俺は気丈でなければならぬ。

ナミは今の状況を理解しているのだろうか。いや、していないよな。理解しているのならこんな落ち着いているわけもないし家に帰りたいつて愚図りだす筈だし。

たぶん、おそらく普通の娘ならそのはず。

考えれば考えるほど不安に陥る負の連鎖。

頭が痛い。胃がキリキリと絞られる吐き気を催す感覚はこの世界に来てからずっと続いている。

今すぐにも逃げ出したい。この世界からログアウトしたい。これが夢ならば、これがゲームの世界ならば抜けだせるはずなのに。逃げ出せない。逃げられない。

しかし、この世界に来られたのなら元の世界にも絶対に行けるはずだ。

そう思わなければやってられない。絶望だけでは生きていけない。

希望を常に持つていないと壊れてしまう。

飾りの少ない長い廊下をアイナとナミの後ろ姿を見ながら無言で歩く。ナミはアイナと話し続けている。コミュニケーション能力の高さは素晴らしいものがある。俺は妹がいなければこんな世界では不安で押し潰されるだけだが、ナミは俺がいなくても大丈夫なのだろう。

実に情けない。俺がすっかりしなければいけないのに。

廊下の窓から見える風景は闇の中に街の明かりが浮かんでいた。暗い、電気がないとこんなにも暗闇に支配されるのか。明るさの中に住んでいた俺は暗闇を知らない。電気がないだけで不安になる。俺は便利な世の中に依存していた。それは当然のことだ。俺はそ

の一つしかない世界で暮らしていたのだから。
アイナは歩みを止める。

「ここがお部屋になります。時間になりましたら使用人がお呼びいたしますのでそれまでお休みになってください」

「ありがとう」

「救世主様」

アイナがナミに微笑むと俺に視線を移して言う。

「我々を助けていただき感謝が絶えません。どうか我らに救済を」

その言葉は俺にとって重すぎた。冗談やお世辞で言っているのではなく本当に信じているのだ。俺達が伝承にある救世主だと。

アイナの一心の視線を俺は見ることができず反らした。

アイナは気にする様子もなく部屋の扉を開けて俺とナミを部屋に入れる。

「では、宴の席で再び」

「案内ありがとう」

「ありがとう」

アイナは一礼をして扉を閉めた。

案内された部屋はこれもお城の部屋という豪華さはなかった。俺は驚沢言い過ぎだな。城についてはまったく知識はないがやはり王様の根城ということに淡い期待をしていたのだがイメージとしての城と現実の城のギャップの差が悲しい。これは人が住むような城ではなく防御手段専用の城なのか。

壁に掛けられている絵画には大地と文字が書かれていた。おそらくこの世界の地図だろう。

目立つ文字でアルハイムと書かれた場所が北の上のほうにあった。周りの国と比べるとアルハイムはとても小さい小国だった。いや、それともこの大地が大きい場合もあるが。それでは他の国が馬鹿でかすぎる。アルハイムの10倍くらい広い国もあるし。

絵の地図だけじゃ距離感が全くわからない。

「にい、これなんて読むの？」

ナミが地図の端っこにある島の文字を指差す。

ええと、これは襖の島。みそぎのしまか。

「これは襖の島って言うんだ・・・よ」

「へえ、みそぎって何？」

文字に対しての違和感。

絵画に書いてある文字は見たことのない模様。この模様が理解できたのはこれが文字だと理解できていたためだ。

無意識にこの文字を知っていたのか。でも、見たこともないし使ったこともない。だけど理解はできる。

「これは読めるか？」

「アルハイム、この場所だね。お城あるのに小さいんだねえ。で、みそぎって何？」

ナミも読める。しかしナミの反応からして全ての文字が理解できるわけではないのか。いったいこれはどういうことだろう。

元の世界の知識分この世界で変換されているのか。

まだある、言葉だ。

言葉が通じている。

俺とナミは日本語しか使っていない。これは日本語が通じるという事実がある。それならば元の世界の言葉が通じていることになる。これを文字と同じように考えてみると、この世界の文字が理解できる、ことと元の世界の言葉が通じて理解できる、がある。

逆はどうだろうか。

元の世界の文字である漢字あるいは外国語がこの世界で理解され通用できるか。言葉に関しては相手側も日本語で返してくるので元の言語発音が分からない。英語で話したら理解してくれて英語で返してくれるのか。

実際に試してみる必要があるが今は妹以外ないのでどうしようもない。使用人が来るまで待つしかない。

言葉と文字は生活する上で重要だ。それも知らない土地では尚更

だ。言葉が通じればコミュニケーションが取れて物事もスムーズに運ぶことができる。

今は言葉が通じているがその理由が知りたい。ただファンタジーの世界だから言葉が通じるなんて理由があるものか、全ては理由があるはずだ。

俺の制服の袖をぐいぐいと引っ張る妹を見る。

「ねえ、にい！！ みそぎつてなに！？」

「ああ、名前だけで意味はよく知らないや」

妹は眉をしかめて、はっ、使えない奴め、といった表情をする。悪いな妹よ、兄も知らない事がたくさんあるのだよ。

窓から暗闇に淡い光を放ちながら浮かぶ月と瞬く星が地を微かに照らす。星がこんなにくつきりと大量に見えるなんて空気が汚れていない証だ。

地図からみても地球の大地の形ではないことがすぐにわかる完全な異界だが空には太陽と月が交互に出るからして星自体は地球と変わらないはず、天文とか知らないから星の位置で場所を知ること距離を測る方法もわからない。

ここは地球の中身が変わった世界なのか。自宅で部屋から見える星が綺麗だな、と呑気に思っていた時が恋しい。

これから、どうすればいいのだろう。どうやったら元の世界に帰れるのだろうか。

考えれば考えるほど疑問が湯水の如く湧きあがってくる。

考え過ぎて頭痛が酷くなる。元の世界でも勉強でキャパオーバーだった俺の脳は完全にオーバーヒートしている。

赤い革が張られている木製の椅子に腰を掛けた。思ったほど座り心地は悪くない。

天井を見上げながら大きく溜息をつく。

何も良い考えが浮かばなかった。どうしようもできない現実を突き付けられるのが怖い。なにもできない自分を指摘されるのが不安だ。

これから先の未来がこんなにも不透明になるとは思わなかった。とてとてと妹が近づいてきて隣の椅子に座った。

「ねえ、にい」

「なんだ？」

「いつ帰れるの？」

それを今言わないでほしかった。

その問いに俺はどう答えてやればいいんだ。もう中学生になるとはいえまだ小学生の妹に。わからないんだ、分からないとしか言えない。

「わからない」

「そう」

ああ、そんな言葉で返さないでくれ。

帰りたいと泣いてくれれば俺はまだ楽になれたのに。「そう」なんて言葉で言わないでくれよ。

俺の不安はこの娘に通じてしまっている。でも、この娘の不安は俺に通じないようにしている。

なんて俺はみつともないんだ。俺が護ってやらないといけないのに俺はどうすればいいんだ。まだわからない。

妹はブラブラと足を揺らしながら鼻歌を歌う。

気にしてないようにして俺に氣遣っている。どうせ自分が我が儘を言う俺が迷惑するからとか思っているんだろう。幼いのにこいつは自分よりも人を心配する癖がある。年相応にあまえてくれないのに、俺はそんなにも頼りないのかと落ち込む。

年齢と精神が乖離しているみたいな妹を見ていると自分が子供からずっと変わっていないことを実感する。

「にい、そういえば私の荷物知らない？ ランドセル背負ってたんだけど無くなっちゃった」

「あ、俺もだ。なんにもない」

荷物が無い。バッグもその中身もなく、ポケットの中身も無くなっていた。光に包まれる時にあの場所に置いてきたのか。それともこの世界に余計なものだったから持って来れなかったのか。

でもどのみちこの世界に必要なものはなかった。

「宿題あつただけどね」

八重歯を見せながら笑う妹を見ると胸がキリキリと痛む。あ、シスコンとかそういう意味ではない。この無邪気な娘の笑顔を見るとこの先の不透明な未来が残酷に思えるのだ。

帰れないかもしれない絶望が頭の中に常に存在する。

できればこの娘だけでも元の世界に戻れますように。

ぼつと時間が進んでいく。ここには時計が見当たらないので時間の経過が把握できない。携帯電話があればよかったのだがそれもな

い。
コンコンとドアのノック音に俺と妹は待ちに待ったかのようにすぐさま反応した。

「失礼します。救世主様お迎えにあがりました」

部屋に入ってきた若い女性はメイドさんだった。しかしテレビで見るとようなコスプレメイドとは見た目が若干違う。もっともっさりした感じのおばさんが着るような格好だ。これが現実なのか。

「にい、どんな料理でるのかな」

「きつとご馳走だよ」

このメイドさんでさっき思い付いたことを試してみるか。

「What is your name」

「はい、私はニニヤと申します」

通じた。通じたぞ英語が通じた。

「おお、にいが英語使ってる!!」

ふっ、妹よ。これぐらい使えなくては6年間も英語を学習してきた意味がないだろう。

それはともかく実験成功。

「ニニヤさん、俺が言う言葉を同じように繰り返してください」

「え？ は、はい、分かりました」

「I came from Tokyo」

「私は、トーキョー、から、来ました」

ここで齟齬が生まれた。英語で話しそれを同じように繰り返すことを要求したが日本語で返答がきた。

しかし英語の意味は理解されている。

同じようなことを繰り返すが結果は同じだった。試しに即席造語でいうと理解はされなかった。

「ニニヤさん、この世界の言葉はいくつある？」

「言葉ですか？ それは一つしかないと思います。今喋っている言葉しか知りませんから」

どういうことだ、今喋っているのが一つだけしか知らない。俺が使った英語は明らかに違う言葉だ。なにかがずれている。

「俺はずっとこの言葉しか使っていないよね？」

「？ はい、救世主様は私と同じ言葉しか使われていません。先程のアベレバレアガという言葉は分かりませんでした」

アバなんとかは俺がテキストに言った言葉だから通じなくて当然だ。

同じ言葉しか使われていないということは俺の言っている言葉がなにかしらの要因で翻訳されていることだ。

つまり言葉に関しては一つの説ができた。

俺のいた世界の言葉は全てこの世界に言葉に書きかえられ通用しこの世界の言葉は俺の世界の言葉、つまり日本語で翻訳され通用している。

なぜ日本語に翻訳されている理由は分からないがこれは良い情報だ。この世界で言葉の苦勞をすることはなくなった。

「にい、さつきから何言ってるの？ 早く行こつよ」

「ああ、もう少し待ってくれ」

ナミは俺がしていることを説明したところで、それが何、みたい
に言うだろつから面倒な説明を省く。

「もう一つ、字を読んで欲しいんだけど」

「すみません。その、私は字が読めません」

二二ニヤは申し訳なさそうな顔をする。

十台半ば程度の女の子で字が読めないとなるとこの国の識字率は
高くはなさそうだ。それが男尊女卑の国。いや、アイナはこの国の
將軍つて言っていたしそれはないか。

字について今はいいか。こちらの文字がこの世界で言葉のように
通じればこの世界の文字を覚える手間もなくコミュニケーションの
問題はほぼ取り除かれる。

言語の壁さえなければ大丈夫だ。

そう自分に言い聞かせる。そうやって一つ一つこの世界を知るこ
とで自分を安心させることができる。なにも知らないままではなに
もできないのだから。

「では、もうそろそろよろしいですか。皆様も救世主様のご来場を
おまちしております」

「うん」

そうだ、俺達には救世主という立場が偶然あるのだ。それを使っ
て元の世界に戻る手立てを探さなければいけない。

俺がやらなくてはいけない。少しでも早く家に帰るために。

長い廊下を渡り一際大きい扉が姿を現す。その扉にも謁見の間の扉と同じく白いドラゴンが大きく装飾されていた。この白いドラゴンはこの国の守り神かなんだろうか。

使用人が扉を開くと大きな広間と大多数の人々が俺とナミに一齐に視線を向ける。

ざわざわと広間が騒ぎ始め、浮かれた表情の人々の表情はもつと浮かれた表情に変わる。

視線と声の重圧をひしひしと感じる。これまでこんな人に観られ目の前でひそひそ話をされたことがないからその重圧で一步後退した。

「皆の者、我がアルハイムの領域を侵略せんとするアンジールの進攻は凄まじく、いかにイージスであっても阻止することに限界があった。しかし此度我がアルハイムに救世主殿が参った。そこに現れた方達はその救世主殿だ」

王が壇上で声を張り上げながら言うつと視線は王から再び俺たちに向き直る。

「救世主殿は戦況を変え我がアルハイムに勝利をもたらしてくれたのだ。さあ、救世主殿。皆が声を待っている。さあ、救世主殿」

俺は妹を見るとナミはニコツと笑って頷いて前に歩き出した。何故ナミが頷いたのか分からなかった。

人々は一步一步前に進んでいくナミを見つめている。

ナミがピタツと止まると人々も完全に静止した。時が止まったよ

うな錯覚があるほどに。

右腕を上に掲げ人差し指をピンと天井を指した。よく見ると左手の人差し指も出している。あいつは何をする気なんだ、と思った瞬間にナミは開口した。

「天上天下唯我独尊!!」

・・・何を言ってるんだツツ!!??

しんとしていた広間はまだ固まっていた。当たり前だ、あんなのいきなり言われたら誰だってそうなる。反応ができなくて当然だ。

「うおおおおおお!!!!」

ナミの近くにいた紳士風の老人が叫んだ。

「救世主様ああああああ!!!!!!!!」

それに続くように若者が叫ぶ。

「我がアルハイムに希望が!!」

「イージスと救世主様がいれば我が国は敗けない」
「救世主様!! 救世主様!! 救世主様!!」

広間が声で振動する。呼応が呼応を呼び大合唱を奏でる。

これはどうなってるんだ。あいつはどういう意味で言ってるんだ。言葉でここにいる人に聞こえたんだ。

轟音は止まず、ナミはケラケラと笑っている。
壇上で男が前に手を突き出した。

「静まれ!!」

声は大きくなかったもの不思議と轟音の中を透き通り皆の耳に声が届くと徐々に声は落ち着きを取り戻していった。

あの王と壇上にいる男はたしか軍師のヴァツシュだったような。王の隣だけあつて発言権も強いのだろう。

「今宵は宴だ。その威勢はまた違う場所で使ってもらいたい。皆の者は存分に楽しんでくれ。それと救世主様への駆け込みはくれぐれもしないでくれ。先ほどの勢いだと救世主様であろうと押し潰されてしまうからな。さて、再開しよう」

パンとヴァツシュが手を叩くと先ほどの戦争直前みたいな空気から嘘みたいに着いたパーティーに変わった。

しかし落ち着いたといえ俺とナミの周りには人が集まってきて身動きが取れない。

質問が左右上下から無数に永遠と飛び交う。

ここ？　こちら？　こいつ？　そこ？　そちら？　あちら？　そいつ？　どこ？　どちら？　あれ？　あそこ？　その？　そう？　それ？　こう？　どいつ？　どう？　どんな？　あの？　ああ？　あいつ？　あんな？　これ？　この？　そんな？　こんな？　どの？　どれ？

俺の視点が上下左右に動きまわり焦点を定めることができない。人と声が多すぎる。

ナミの方はこの状況を楽しんでいた。飛び交う質問をどこぞのなんとか太子みたく次々と解消させていた。

だれか助けてくれ。

「済まない。救世主様に用がある」

救世の声が人々を割って道を作る。

「イージスだ」

「將軍閣下だ。今日も麗しい」

そんな小声が聞こえる間を通り抜けて白いドレスを纏った美女がやって来る。

その娘は茫然としている俺に手を差し伸べる。

「救世主様、少しお時間を」

銀色の剣士は銀色の淑女として俺の前に再び現れた。

柔らかい微笑みをした表情はとても綺麗で触れた手はしなやかで温かい。その手に引き寄せられる時にこれまでにない安心感があった。

手を握られたまま広間を通り抜ける。後ろからパタパタとナミがついてきていた。

アイナは俺をバルコニーへと連れてきた。外は暗く松明が小さく照らしていて穏やかな風が体の熱を冷やす。

「大丈夫でしたか？ 皆救世主様をお知りになりたいだけです。悪い風には思わないでくださいね」

「え、いや、そんなことは思っていないよ」

そうかこの娘は困っていた俺を助けてくれたのだ。

「やはり救世主様の元に皆が駆け寄ったか、まあ仕方ない事だ」

横からヴァツシュが赤い液体の入ったグラスを揺らしながら歩い

てきた。

「軍師殿か今回も貴方の策略で勝てた」

「今回は私の力不足だ。救世主様が現れなかったら敗北していた。救世主様礼を申し上げます」

ヴァツシユは膝をついて頭を下げた。こういう時はどういう反応をすればいいのだろうか、対応が全然わからない。

「止めてください。俺達は何にもしてないんだ。ただ偶然なんだ」
「なるほど、救世主様は謙虚でなさるのか。自らを棚に上げず、さすがは救世主様だ、器が違う。私ヴァツシユは貴方に敬服いたします」

そういうのは止めてくれ、俺は何を言い間違えたんだ。ナミも目を輝かせないでくれ。兄はそんなにすごい人物ではないと知っているだろう。

「ところで救世主様の話を聞く限りこの世界とは別世界から来たと理解してよろしいでしょうか？」

ヴァツシュは顔を上げて真剣な鋭い眼光で見上げてきた。

「俺もよくわからないけどそうなるのかな」

実際は異世界に来たとは思いたくはないのだがこんな状況で違うと言っても現在から逃避しているだけになる。

「ならば現在この国が置かれている状況等もご存知ないと」

「そうだね。全然わからない」

「そうですね、どこから説明したらよいか。では、今の状況をお話いたしましょう。ちょうどイージスもいるのですからね」

「そういえばイージスって？」

ヴァツシュは一瞬硬直してすぐに口元を緩めた。その隣でアイナが苦笑いしながら顔を赤くさせていた。

「本人の目の前でそういうことを言うのは中々残酷なものがありま
すよ。いやいや救世主様は素晴らしい」

「軍師殿！！からかうのは止めてください。その呼び名は皆が付けたもので私は・・・」

え、どういうことだ。もしかしてイージスってアイナのことなのか。

「ここにいるお方こそかの有名なアルハイム將軍閣下ことアイナ様であり、そして二つ名は銀翼イジスの楯であらせられる。救世主様はイージスをどう思われるか？」

「軍師殿。いささか酒が回ってらっしやるのではないですか？」

アイナはどこからともなく刀を取りだしてヴァツシュに向ける。どこから出したんだその刀は。ってか危ない、いや、刀を突き出していることではなくアイナの目が危ない目つきになっている。

「酒をどのくらいの量を？」

「残念ながら一滴も口にしてはいない。これが平常だ」

「救世主様が見ておられるぞ。そんなはしたないことは憤むべきだぞイージス」

アイナはこちらを横目で見て慌てながら刀を消して俯いた。ヴァツシュの方は安堵した溜息をした後笑顔でこちらを見た。

なるほど、アイナは真面目過ぎてからかいの耐性が低いのか。それでいて少し沸点が低い感じも見受けられる。ヴァツシュの方はお調子者みたいだ。

「フッフ、戯れはこれぐらいでよろしいかな。さて現在の状況をお話しましょう。現在我らの国アルハイムと隣国アンジールが交戦状態であります」

交戦状態、戦争が起きているのはここに来て最初に見た光景だ。よく分からなかったけれど人と人が殺し合っていた場所だった。それはテレビで見るとような非現実的な光景で俺は戦争を体験したこともないし見たこともない。ただテレビや本の中の話しだけであり実際に起きていると言われてもよくわからない。

「アルハイムは小国であるが周りは良質な鉱山帯であるため経済的にも裕福な方なのです」

「その良質な鉱山帯を目的で敵が？」

「それだけではなく。冬にはこの土地は天険となり最高の要塞となる。そのおかげもあり小国でありながらもこちらの勢力の3倍はあるアンジールの侵略を食い止めている。つまりアンジールは財力となる鉱石という矛と要塞となりえる土地という盾を手に入れようとしているのです」

「軍師殿の言う通りの状況になっています。我が国を小国と馬鹿にして攻め込んできたアンジールは卑怯者です。もしも同じ程度であったならば奴等は今でも笑みを浮かべながら我等と偽りの平和をすごしていただろうに。よもや偽りとはいえ平和でありたい我が国を侵略してくるとは嘆かわしい」

俯いていたアイナは拳を強く握り震えながら怒りを籠めた声で言う。

ヴァッシュはアイナが言い終わると同時に話を続けた。

「冬にさえなれば我が国への侵略は止まりますが、冬まであと三月はあるのです。アンジールの侵略は凄まじくイージスであっても限界というものが、ありこのまま行くと次の冬が来る前に我がアルハイムは落ちてしまう」

「軍師殿！ 貴方がそんなことをおっしゃられてはいけません。」

貴方の知略と我が武力と救世主様がいればアンジールなど振り返りにできません」

「そうだな、イージスの言う通りだ。酒の力は恐ろしい私が弱気にさせられるとは、私も少し飲み過ぎたようですからまた次の機会に会談をいたしましょう。救世主様どうか我らに勝利の杯を次の冬にも飲ませて頂きたい」

ヴァツシュは空になったグラスを持ちながら広間へと戻っていった。また一つプレッシャーが俺に押し掛かる。なにも力のない俺に期待されても最後は絶望しか残っていないのに。俺は救世主という象徴でしかなりえないちっぽけな存在だ。俺は救世主という行動を起こせないただの大人のなりかかった子供なのに。

くいくいと俺の袖を引つ張る妹は器用に片手で二人分の料理を乗せた皿を持っていた。

「にい、これ美味しいよ」

ナミは鶏肉を頬張りながら俺に皿を渡してきた。

そういえばなにも食事を取っていなかった。料理を見ると腹がきゆるきゆると音を立て始める。

「救世主様どうぞお食べになってください。今宵はあなた方の宴なのですから」

フォークでブロックの肉を刺して口に運ぶ。味はしっかりとある。現実の味と共に料理を次々と運んでいく。

俺はこの世界で生きていることを実感した。

ぺちぺちと頬を叩かれる痛みと頭痛によって目が覚めた。窓から差し込む光が眩しい。ここはどこだ、俺の部屋じゃないぞ。

「やっと起きた」

妹の顔が視界に端から出てきた。

「メイドさんがご飯持ってきてくれたよ。食べたら今日は何するの？」
「？」

メイド？ メイドってあのコスプレイヤーの？

寝起きで頭が混乱している。必死に状況を確認しようとするが夢と現実が交錯して把握ができない。頭痛が思考を中断させる。

なんで、頭が痛いんだっけ。そうだ、昨日用意された酒を飲みまくったんだっけ。

記憶が所々無くなっている。

乱暴に無理矢理混乱している脳内を整理させベッドから起き上がる。テーブルには大量の朝食が用意されていた。パンが山盛りに積みまれてベーコンや卵料理、果物が3メートルくらいの長さのあるテーブルいっぱいに置かれていた。

これも夢なのか、ありえない量だろ。しかも二人でこの量を食えと言っのか？ 拷問だ、部活の合宿の追い込みじゃあるまいし。

ナミはちゃっかり椅子に座って食べる準備をしていた。

「すごい量だよねえ、全部食べなくていいんだって」

「そうか、よかった」

頭痛のする頭を抱えながら椅子に座りパンを手に取った。ほんわりと温かくできたのパンのようだった。他の料理も湯気が出ていて量は規格外だが美味しそうだ。

「でさ、今日は何するの？」

パンを千切って食べながらナミは言う。

今日は何をすべきなのだろうか。とりあえずアイナかヴァツシュ辺りにでももつと状況を聞いたり元の世界に戻る方法を聞いたりしないといけない。

「食べ終わったら外にでも出ようか」

「おーけー。分かった」

ナミは親指を天井に突き上げ白い歯を見せて笑う。

こいつは能天気過ぎだ。不安とかの感情が欠如しているんじゃないかと兄は心配するよ。

腹八分目程度に朝食を済ませて畳まれていた制服に着替えた。

どうやら俺が記憶を消し飛ばす程飲んだ際に誰かが着替えさせてくれたようだ。まあ、だれが着替えさせてくれたのかは気にしないでおこつ。考えるだけで恥ずかしい。

ナミと部屋を出ると相も変わらずの長い廊下とそれに続く様に窓が設置されていた。

「ねえ、昨日のお姉ちゃんがいるよ」

窓の外を見るとナミの言う通りアイナがいた。昨日戦場でみた剣

士の格好で兵士と訓練をしているようだ。

相手は男だと思うがその男共はアイナにまるで歯が立たないよう
でアイナは刀で倒すのではなく拳で捻じ伏せたり蹴りで粉碎したり
している。

映画の撮影を彷彿させる映像だ。ワイヤーアクションをしている
みたいに兵士が飛んでいく。あれでよく立ち上がれるな。

「お姉ちゃん!!」

ナミが窓から体を乗り出してアイナに向かって手を振る。それに
気付いたアイナはこちらを向いた。その隙を好機と見た兵士が背後
から飛びかかるがアイナの回し蹴りで側頭部を穿たれ崩れ落ちた。

「救世主様!! しばしお待ちくださいませ!!」

アイナの動きが先程と比べられないような尋常ではない速さに変
わり兵士が次々と地面に寝転がるのが見えてやはり映画のワンシ
ーンではないかと思う。

数秒で何十人といった兵士は地面の上で倒れ伏した。アイナは肩で
息をするわけでもなく余裕を保っていることがここから見ても分か
る。なんていうか準備体操をした後みたいだ。

「朝の修練は以上だ。各々の技能を高めるように、解散」

解散という号令を受けても兵士達は起き上がらず地面に伏せたま
まだった。

もしかして朝の修練は毎日なのだろうか。それならば毎日朝起き
たら叩きのめされるといふことか、俺だったら逃げ出すな。

アイナはすぐにやって来たが汗一つかいておらずとても涼しげで
訓練をした後とは思えなかった。

「おはようございます。昨日は愉しんでいただけただけでしょうか？」

「うん、よかったよ」

「楽しかったよー」

よかったと言うがほとんど記憶が曖昧で覚えていない。確かアイナとヴァッシュと重要な話しをしていた所までは記憶がぼやけながらも残っているがその後のホールで食事を始めた所からはっきり思い出せない。

「それならば開いて良かったです」

アイナは銀色の美しい髪を靡かせながら淑やかな笑顔を見せた。よく見ると整った輪郭に一つ一つ磨かれたパーツが完璧な配置で置かれている。美少女などという言葉があるがそれはアイナに当て嵌まる言葉なのだろうと思った。

「あの、救世主様？ えと、修練の後ですから、その、汚れや臭いは少しばかり見逃してもらいたいです」

「へっ？ いや、そんなつもりじゃ・・・痛っ!？」

いきなりナミがエルボーを脇腹に打ち込んできた。

なにをするんだ、と言おうとナミを見るとその表情はものすごい剣幕を見せた。ナミの表情を見て俺は言い返せなかった。妹よ、情けない兄で済まないな。

「お姉ちゃん、私達外に行きたいの」

ナミはさっさと用件を言いながらアイナに向きを変えると同時に表情も一変させいつもの笑顔モードにさせた。ナミ、なんて恐ろし

い子。

「外ですか、護衛を何人付けければいいと言ったことでしょうか？」

「いや、違うよ。それに護衛とかいらぬよ」

「しかし、護衛は付けてもらわねば何かあった時に困ります」

何かあった時には多分手遅れってパターンが多いんだよな。やっぱり救世主も狙われるのかな。

アイナは少し困惑した面持ちで何かを考えていた。

「では、案内人ということで救世主様に付けたい人物がいるのですが。もちろん私が一番信頼をおける者なので安心してください。すみませんがその者を呼ぶために少しお時間をいただきたいのですが」

案内人ならいろいろ聞けるしこの世界、この国の詳しい情報が欲しい俺達には必要だ。

「いいよ、お願いするよ」

アイナは一礼すると廊下を駆けて行った。

結構迷惑をかけているんだよな、と少しばかりある善意の心が痛まれる。

そういえば將軍つてどのくらい偉いのだろう。軍を指揮するくらい知識しかない俺には全く分からない。かなり優遇されて接してくれているから相手の立場がよく理解できていない。

それにアイナはこの国の英雄みたいな存在らしい雰囲気周りの人から感じていた。

年齢は多分俺と同じか少し上くらいだろう。その若さで將軍の地位につくってことはやはりアイナはこの国でかなり高位の立ち位置かもしれない。

廊下で待つ間は先程アイナと兵士が訓練をしていた場所を眺めていた。兵士達の行く末をのんびりと見守っていたのだ。

兵士は一人ずつ起き上がりまだ地面に伏している兵士を運んだり壁に寄り添って休んだり一人でよろよろと千鳥脚のような歩行で城の中へと消えて行ったりという様々な行動をしていた。

最後の一人が起き上がったところで妹が「にい、来たよ」と殴られた脇腹部分の服の一部を引っ張りながら言った。

見るとアイナの隣に少女が共に歩いていた。アイナも身長はそれほど高くないが隣の少女は頭一個分小さいが鎧に包まれた物騒な姿だ。アイナのイメージが銀だとすると少女の方は光沢のない銀に近い灰色のイメージだ。

「お待たせいたしました。この娘が案内役を務めます」

「はい、お役目仕りました。パラシイです」

パラシイと名乗る少女は鎧に身を包んだ姿で案内役というよりは、はり護衛にしか見えない。地面に擦れそうな少女にとっては大剣を背中に背負い両腰には一本ずつ剣が鞘に収まっていた。ガチャガチャと鎧の出す音が軽くはなさそうに思えるがパラシイは慣れているようで笑顔は崩れていない。

アイナが綺麗系だとしたらパラシイは可愛い系にカテゴライズされるだろうと俺個人の第一印象だ。それは顔だけ見た場合であってパラシイの来ているゴテゴテした重戦車のような装備は可愛いという言葉は一切含まれていない。

「救世主様。すみませんが私はこれから軍議等の所用がありますので全てこの娘にお訊きになってください。では、失礼します」

アイナは慌てた様子だが笑顔を残して踵を返して来た道に戻っていった。まるで木枯らしのように急に現れては突然消えるようだ。

アイナの後ろ姿が廊下を駆けるのを見ながらぼつんと残された三人の内最初に口を開いたのはパラシイだった。

「姉様から話は大体聞いています。質問は常時緊急時いつでも承りますよ」

「姉様？」

「最初の質問ですね。あの堅苦しさが麗しさの象徴であるアイナ將軍閣下は私の姉となります」

アイナの妹なのか、雰囲気真逆すぎる。妹だから一番信頼が置ける者だとアイナは言ったのか。しかし男の俺が女の子に護衛されるというのも情けない感じがする。

「外出をしたいという用件だと姉様から聞いているのですが行きた

い場所がありますか？」

「行きたい場所というかこの国とか世界が分かる場所みたいなものがあるかなって」

「流石は世界を救世する者ですねと感心します。それでしたら外ではないですが大図書館がありますよ」

図書館か、それならいろいろ分かるかもしれない。大図書館という程なのだから歴史書とか文献がたくさんあるだろう

ふと、ナミの顔を見ると怪訝な顔をしていた。妹はインドア派ではなくバリバリのアウトドア派だ。家でゲームをしたり本を読んだりすることよりも外で遊ぶ方を真っ先に優先的に選ぶやつだ。

俺が外へ行くと言うから喜んだのだろうかから図書館に行きたいとは思わないだろう。

「俺は図書館に行きたいけれどナミはどうする？」

「・・・一応、いとい行く」

外に行くと言うと思ったのだが、少し間を空け図書館に行くと言った。たまには本を読んで読解力等を養わなければいけないからな。所謂若者の活字離れというのを妹が解消させる一歩になる。

「二人の合意を確認しました。では、付いてきてください」

案内役権護衛役のパラシイの後姿は物々しい大剣と鎧が少女を隠しているのだ。大剣と鎧が自分で勝手に歩いているみたいだ。

ガツチャガツチャと音を立てながら重そうな装備が上下に揺れる。ナミも気になっていたらしくパラシイに尋ねた。

「ねえ、それ重くないの？」

「装備品の質問ですね。これはあまり気にしないようにしているのですよ。これらは私を守る体の一部でもありますし重さで言うと合計で60キロ程です」

「へえ、私二人分くらいなんだね」

普通の鎧の重さがどれだけ重いのかは知らないがこの少女は60キロの重さを常に装備しているのか。重そうに見えたが少女の付ける装備の重さではないだろ。ナミもその重さがどんなに異常か気にしていないようだ。

パラシイはアイナの妹らしいからアイナみたいな異常な身体能力を持っていてもおかしくないと思うがこの世界の女性の戦闘員は皆こんな化け物じみた者ばかりなのだろうか。

アイナが信頼する程だからアイナみたく兵士を薙ぎ払うように倒しているのを想像できた自分が怖い。

大図書館だという場所に行く途中にナミがパラシイにいろいろな質問をしていた。その質問は大して収穫があるようなものではなく日常的なことだった。

いつもなにしてるの？ 城内及び所領地内の警護です。

何歳？ おおよそ15、6歳となります。

その剣本物？ 骨まで切り刻み粉碎できます。

こんな感じに物騒なことも言っていたが俺にはどうでもいいことだった。妹は質問をなんでも返してくれるのが楽しいらしくこれは？ あれは？ と大図書館に着くまで途切れない質問をパラシイにぶつけていた。

図書館は城の敷地内の端っこに位置していた。館内は大が付くほど広くもなく本棚も数えるほどしかないし人も全然見当たらず静かな倉庫に本が置かれているだけのようだ。

パラシイは奥の扉を開け「こちらです」と手招きした。

部屋の中は管理人室のような雑多とした場所だったがここにも人はいない。それよりも図書館に人がいないのだ。何故だろうと考えるとメイドのことを思い出した。彼女は文字が読めないと言ったはずだ、そもそも文字が読めなければ図書館に来る必要はないのではないか。

鎧の少女から鈴の音色が聞こえ始めた。それは一定のリズムで音を奏でる。

淡い光が現れフワフワと上下に揺られながらパラシイの周りをゆつくりと周る。

「ニンゲンド。ヒサシブリ、ニンゲン」

「この用事は少ないからね。で、下に行きたいんだけど」

光が喋った。それに対してパラシイが普通に碎けた喋り方をしてるのでこれは恐ろしい物ではないと思うが正直驚いている。これはナミもかなり驚いていた。

「わわっ、光が喋ったよ」

「ワワツ、アタラシイニンゲンド。イタズラシテヤルカー」

パラシイが光を捕まえると光が薄まり手で何かバタバタと暴れているのが見えるようになった。

「ハナセー。ヤメロー。イタズラスルゾー」

暴れているのは透明の羽を持ち白色のナイトキャップを被り耳はちょこんと尖がっている小人、というより妖精だろうか。体の周りは淡い光が包んでいる。

「これは何？ かわいい」

「初めて見るようですね。これはピクシーという妖精の一種です。この下にある大図書館の整理等の手伝いをしてくれる子です」

ナミは「おお！！」と驚嘆の声を漏らしてピクシーのとても小さい頬を指でぷにぷにと押すとピクシーは嫌そうな顔で唸っていた。

妖精は実在した！！ みたいなヤラセのテレビの内容が浮かんだがこれは本物だ。実際に本物を見ると想像通りで驚きも半減してしまい、こういう幻想で生きるものを自分の目で見ると、やはり別世界に来たんだという感覚が重圧として一層押し掛かる。

「下に行きたいから開けて。そしたら離すわ」

「キョーノニンゲンハランボード。シッテルニンゲンガキタカラアケテー」

ピクシーが助けを求めるように部屋の中で叫ぶと入って来た扉が突然開いた。扉の先は通って来た図書館ではなく地下へと向かう階段とパラシイが握っている光とは別の光が浮いていた。

パラシイが手を離すと弱り切った蛍のように弱々しい光を帯びながらフラフラと階段の奥へ他の光と共に消えて行った。

パラシイが光を追いかけないように躊躇いなく階段を下りるのをナミがぴったり後ろについて行った。少しは躊躇くらいしてもいいだろう、入って来た扉が開くと別の場所が現れたのだから。未来のネコ型ロボットが四次元ポケットから取り出すドアを現実で見たようだ。これはどこでも繋がるというわけではなさそうだが。

恐る恐る階段を踏みしめると深く何かよく分からない空間というのだろうかそれに飲み込まれる錯覚を全身で受けると次に階段が下から迫って来る恐怖が俺を襲った。

無自覚に体が硬直しなにもできず黒でも白でもない本当に色の無い世界に俺自身が浸食された。

時間が溶け出し体は元の時間軸で動く様になりいつの間にか四方八方に大量の本が積まれている場所に立っていた。

本の海の世界に迷い込んだみたいだ。周りには積まれた本しかない静かな場所でそれ以外なにもない空間が覆っていた。

「おや、イージスの妹君か久しいの。それとその若者二人は初見だの」

本が何重にも無造作に積まれた間に本を椅子代わりに座っている人がゆっくりとした口調で喋りかけてくる。

パラシイは本の樹海を越えて声の主に向かった。

「お久しぶりです、ラダマンティス様。今日は救世主様の案内をするためここを訪れました」

「ほほう、救世主と」

パラシイとは面識があるようでラダマンティスという老紳士はモノクルの奥にある目を細めながら俺とナミを交互に見比べていた。

老紳士は持っていた分厚い本を閉じると放り投げた。本は放物線を描くことなく空中で浮遊していた。

パラシイはそれを気にすることもなかったがナミは「おお!! 浮いてる!! 飛んでる!!」と空中で浮かんでいる本を見ながらはしゃいでいた。当然俺は重力という現象を無視した本を見ながら目を点にさせていた。

「確かアルハイム国だったかな。北方の伝承の書はどこだったか。これだったか。いや、違うな、これだったか」

老紳士は足を組みながら指をくいくいと動かすと本が老紳士目掛けて飛んできてまた放り投げると違う本がまた飛んできた。二度目はどうなってるのか考えるが三度目になるともうこれが普通のことだと納得する。

「これだ。・・・ふむ、黒の少年と白の少女の救世物語か。

なるほど、見た目は伝承と全く同じだ。それでこのエリュシオンに何用か？」

「エリュシオン？」

「ふむ、なんだこの場所を知らずに来たのか。妹君、貴女はなんにも話をしておらぬのか」

「質問がなかったたので。それとラダマンティス様から話した方が確実です」

「まったく、妹君は面倒くさがりだの。老人を使うものではないぞ、しかし私も忙しいというわけでもないからの。今日は気分が良いから老人の長話しに付き合ってもらおうかの」

パラシイは眉をしかめて老紳士みたく本を下敷きに座ると本が苦しそうにギチギチと悲鳴をあげる。老紳士も眉を眉間に寄せて潰れる本を横目で見た。

いつの間にかナミはピクシーと戯れていた。

俺は老紳士の手招きで誘われ積まれている本をどかして目の前の床に座った。

「ここエリュシオンは特別な空間であつての、これまで記録されてきた情報が集まる場所なのだよ。私はここを統治するラダマンティスだ。よろしく頼む救世主」

「ナギと言います。あっちにいるのは妹のナミです」

「ふむ、そうか。救世主は何を知りたいのだ？」

知りたいこと。そんなのは決まっている。

「元の世界に帰る方法」

老紳士は手を口に当て「ふむ」と考え込んだ。もしかして考えるってことはないのかそれともどこにあるかを探しているのか。合格発表が出る瞬間がとても長いように感じるように一瞬の時がとても長く過ぎる。

長い時の中で横からの強い視線に気付いた。パラシイがこちらをじっと見ていたのだ。その目からは「国を見捨てて帰るのか」という強い殺気にも似た視線が俺を突き刺す。

「世界は一つだけではないというのを救世主は信じるか」

「え、俺はそもそも違う世界から来たんですけど」

「それならばそうだとということか。いや、今は信じるか信じないかだけだから気にしないでくれ。そう、この世界の始まりから話そう」

老紳士の指の動きに合わせて飛んできた本を開いて物語を語り始めた。ゆっくりと懐かしむかのように老紳士は一頁一頁丁寧に言葉にしていく。

第1章、世界の起源。

世界が生まれる前。光も闇も白も黒もなにもない場所に神様が存在していた。その神様はまず光を作るとその対の闇が生まれた。次に時間を作ると空間が生まれた。大地を作ると天が生まれた。そして生物という生の概念を作りだすと死という概念が生まれた。世界が作られると別の世界が生まれその世界がまた別の神を産んだ。

別の神は世界を新たに作る。それは何度も繰り返され世界は作られた。

第11章、世界を繋ぐ塔。

最初の神によって最初に作られた世界には他の世界と通じるための塔が作られた。その塔は全が一であり一が全である唯一無二の塔であり全ての世界を繋ぎ全ての言語を繋ぎ全ての時間全ての空間を繋ぐ全ての中心である塔である。塔の名前はバベル。

他にも長々と読み進めていたが宗教のことはよくわからないので老紳士には悪いがほとんど流しながら聞いていた。読み終わったらダマンティスは本を閉じて一呼吸置いて目を閉じた。

また長い沈黙が続く。後ろで騒ぐ妹とピクシー達の声が静かな空間に響く。

老紳士の話の中でなにが重要なのか聞き流していた俺には理解しようがなかった。まともに聞いていなかったのだから。俺は回りくどい話は好きではない、妹はもつと好きではないのだろう。

モノクルのズレを直し老紳士は目を開けた。

「というわけだ、救世主」

「どういうわけですか？」

「・・・つまりだな、バベルの塔が帰る方法だということだ。バベルの塔は全てを繋ぐ塔だから救世主の世界とも繋がっているはずだ。この伝承が本当であればの」

「それでバベルの塔はどこにあるんですか？」

「どこかということしか分からないのだよ。エリュシオンに情報としてあると思うが見ての通り膨大だ。私は60年以上ここにいて全ての情報の1%も読んでいないだろう」

それならば俺はあと何十年調べればいいんだ、帰る前に老衰で死んでしまう。

「そう絶望した顔をするものではない。あくまでここにあるのは情報であって実物ではない。ここにある情報が全てではない。ここに情報としてあるのならば外にも同じ情報があるのだから」

帰る方法はないわけではなくこうして可能性としてあるのだ。世界が一つではなく繋がっているのも俺達がこうしてこの世界に来たということの実証されているじゃないか。来たのだから戻るはずだ。

塔の一説にあった全ての言語を繋ぐということは俺が試したことじゃないか全ての言語は一つとなり一つの言語は全てとなる。だからこそ言葉が通じていることができて知らない字を読むことだってできたのだ。

バベルの塔はあるはずだ。実際にこの老紳士が言う伝承の一部を俺は体験しているのだから。後は場所さえ分かればいいのだ。希望はある。

「ふむ、なにか自分で解決したようだの。死んでいた目が輝きを取り戻したようだ。まあ、聞いているだけじゃ退屈だろう。救世主の世界の話をしてもらいたい」

老紳士は優しくも棘のある言葉を言う。確かに俺は今まで死んでいた目をしてきたのかもしれない。そう今も変わらないと思うが微かな希望は見つけた。それだけでただ目標を持つだけで人は輝くのだと恥ずかしいながらも心の中で思った。

俺は頷いて帰るべき場所の話をし始めた。老紳士よりもゆっくりと懐かしむように丁寧に自分の居場所について語る。

七代兄妹がアルハイム国で生活を始めて二週間があつという間に過ぎた。救世主の肩書があるおかげで二人は衣食住にも困ることはなく逆に元の世界よりも贅沢な暮らしを送っていた。

ナミは毎日能天気楽しんでいたがナギは贅沢な暮らしが常に違和感だった。本当は救世主でもなんでもないただの少年なのに異常な優遇で後ろめたさがナギの重りになっていた。

その原因の一つが街を訪れた時のことだった。

アルハイム国は豊かだと聞いていた。しかしそれは位の高い者たちだけであつて平民は貧しい暮らしだったのだ。兄妹に毎朝用意される一回分の朝食は平民にとって1ヶ月分に相当するものだと思いつた時はナギの顔が真っ青になった。

歴史を学んだナギはこの状況は非常にまずい、もし平民が兄妹の暮らしを知ったら暴動が起きるのではないか等思うと不安と恐怖がナギを握りつぶそうとした。

もちろんナギはそれを知ってから自分達の食事の量や衣服などを街人に提供するように言ったがメイドやパラシイは「救世主様は自分のことだけをお考えになるだけでよいのです」と一蹴された。

ナギはほぼ毎日エリユシオンに赴いて本を漁る日々を過ごしていた。ラダマンティスに相談したが「アルハイムはそういう国なんだよ」とアルハイムの歴史書を読みながら憐れんだような虚しい響きの言葉で返された。

誰も街人にしないのなら自分がしてやろうとナギは溜めた食糧を持っていこうとしたがパラシイに阻止されてしまった。

パラシイの行動にナギは理解できなかったが相も変わらず鎧に包まれた少女はナギの質問に答える。

一度餌をもらった動物はその味を覚えます。二度餌をもらった動物は時と場所を覚え。三度目はそれが当然と思い。四度目がないと自ら集りにくるのです。

言い返したかったがパラシイに似合わない悲観や諦めが含まれた言葉と表情を感じたナギはその答えに言葉が出なかった。何を言っても無駄だとナギは諦めたのだ。

救世主の役目はなんなのか。誰も助けなくて何が救世主なのかとナギは本の森の中で悩んでいた。救世主自体を否定していたナギは毎日救世主と呼ばれることで自分が救世主だということを認め始めていた。それは暗示や催眠と同じだったがナギは知らずの内に救世主として何ができるのだろうかと考えようになっていた。

目の先だけ考えての救世はただの自己満足でしかないぞ。

ラダマンティスがぼやく様に言ったのをナギは聞き逃さなかった。その言葉の意味とは、目の先だけの救世とはなんだろうか。

どういう意味か、と訊いてもラダマンティスは惚ける態勢を貫いて何も答えてくれなかった。ナギは答えのない答えを探し続けたがヒントもない問題を解くことを未だにできていなかった。

「にい！！ 見てこれ」

部屋にエリユシオンから戻って来た俺のもとに妹がフルスマイルで寄って来ると手を顔のすぐ前に突き出した。

近すぎて焦点が合わなかったので手を引き離すと妹の手には赤い宝石が握られていた。

「どうしたんだ、これ？」

「パンをあげたら貰ったの。綺麗でしょ」

ナミは宝石を光に反射させながら笑顔と共に輝かせていた。

なんとも太っ腹な人だ、それほど腹が減っていたのだろう。この国には金はあるが物資が少ないことだから背に腹は代えられないことだしそういうのもあるのだろう。

「それと勝手に外に出ちゃいけないだろ」

「大丈夫だよ、心配し過ぎだよ」

俺達兄妹は案内役と書いて護衛役と読む人が付いていなければ城外に出てはいけないことになっている。つまり軟禁に近い状態にされているというわけだ。

今日はいつもの案内役のパラシイが私用につき城内でおとなしくという警告がされていたのだがナミは性格上部屋でのんびりとかおとなしくというのは拒否反応を起こすので最近は勝手に外に出ていくようになった。

街に友達もできたようでそれは嬉しい事なんだがアイナやパラシイの言う通り何かあるかもしれないからあまり勝手に出歩かないように言っているが妹は右から左へと音を貫通させていて聞いてくれない。

「でね、これくれた子を連れて来たの」

「はっ？ ここにか！？」

「うん」

ナミは何故かドヤ顔で言い切った。

城内に誰とも分からない奴を連れてきたらさすがに駄目だろう。もし誰かに見つかったら連れて来られた奴は最悪処刑なんかありえるかもしれない。

「おい、それはまずい。早く帰ってもらうんだ」
「ええ〜」

それがどういいう状況になるかも理解できていない妹は不満で膨れっ面をしている。

ところでその子はどこにいるんだ。部屋を見回すが隠れているのか誰もいない。

「で、その子はどこにいるんだ？」
「……」

ナミはパラシィに貰ったポーチを開けると中でモゾモゾと動いている物体がいた。

その物体は窮屈そうにポーチから顔を覗かせて俺と目を合わせた。

「きゅうー!!」
「……」

色は汚れた灰色で首は長く爬虫類のような目と体をして背中だるう部分からは翼が生えていてポーチの端からは尻尾がくねくねと動いている。

見た目はトカゲに翼が付いたような感じで鳴き声は「きゅう、きゅう」と鳴く動物だった。もちろん初めて見る生き物だ。

初めて見るけれど多分知っている生き物だ。その生き物はジッと俺を見つめて視線を外さずに「きゅう、きゅう」と喋りかけてき

ているのだろうが流石に動物との会話は理解できないみたいだ。
これは何か分かるのだが妹に聞かないといけない気がした。

「なあ、これはなんだ？」

「トカゲ！！」

「ドラゴンだろー！！」

ファンタジーといえば剣と魔法にドラゴンと相場が決まっているほどの定番モンスターだ。そのモンスターは妹のポーチの中に入る全長20cm程度の小柄でかわいらしい生き物だ。妖精や人間離れた人に慣れたせいかちっこいドラゴンくらいじゃ驚かなくなっていた。慣れって恐ろしい。

ドラゴンは翼を懸命に羽ばたかせてポーチから脱出してナミの頭の上に乗った。

「きゅう、きゅう」

相当窮屈だったのだろう、翼を大きく広げて猫のように背伸びをしている。

ナミは昔から動物に好かれる所があったがまさかドラゴンにも適用されるとは思わなかった。

それと、このドラゴンは安全なのか。見た感じは凶暴ではなさそうだが。恐る恐るドラゴンに手を出して触れてみたが暴れたり噛みついたりしてこなくおとなしく人懐っこいみたいだ。喉を指で擦ると気持ちよさそうにしている。

「にい、この子、飼っていい？」

ナミがドラゴンを頭に寄せたまま言ってきたのだ。俺は構わないが一応居候の身であるからしてペットの飼育に関しては許可を貰わなくてはいけない気がする。

それにドラゴンをペットとして飼育なんかできるのだろうか。食べ物とか散歩とかどうやればいいのか全く分からない。エリュシオンにでもドラゴンの飼い方なる本があればいいのだけれど。

「まあ、俺は別にいいけれど」

「わあ、やったあ。名前は決まってるの〜」

ナミは聞いて欲しそうに言うので「どんな？」と尋ねると頭の上に乗っていたドラゴンを掴んでぐいとこちらに突き出した。

「アマルファイ!!」

「きゅう!!」

アマルファイと呼ばれたドラゴンは翼をバサバサと動かして心地よさそうな鳴き声を出した。

名前のセンスはともかくこのドラゴンもそれで喜んでるみたいだ。俺が名前を付けるとしたらバルムンクとかベオウルフとか残念なネーミングセンスになってしまうから、まだ妹が付けた名前の方が良いだろう。そういえばこの名前は竜殺しの英雄だった。

アマルファイの意味といえばうる覚えだが美しい、麗しいなんかだったと思うのだがまだ日本語以外まともに習っていない妹が何故そんなことを知っているのだろうかと疑問に思うとナミはポーチからメモ帳程度の小さな本を取り出した。

確かこの本はエリユシオンにあったものでナミがラダマンティスから譲って貰ったものだ。

エリユシオンはこの世界の記録全てが集まる空間でありこの世界にある本や情報は必ずエリユシオンにあるということだ。もしエリユシオンに一冊しかなくこちらにはもう存在しない本をこちらに持ってくるならエリユシオンにその本が再び補充される。こちらとエリユシオンで二冊の本が存在することになるがもう一度その本をエリユシオンに持っていくと消失してしまい、時間の経過でも消失してしまふ。

ラダマンティスが言うにはエリュシオンにある本は情報が本として読める物に変換されているだけなのだという。その本は魔法で生成されているもので時間が経つにつれて魔力は少なくなり最後には無くなるので消えてしまいうらしい。それでも持ち出した本は数ヶ月形を保っていることができるという。

ナミが取り出した小さな本の題名は“小竜の冒険”というものだった。その主人公のドラゴンこそがアマルフィという名前であり最後は世界を救ってお終いという子供向けの童話みたいな話だとナミは説明してくれた。

救世主の竜か。ナミは俺たちの境遇と同じ竜の名前を付けるとは、この小竜も随分な名前を付けられてしまったようだ。名前負けしないように成長してもらいたいものだ。

ちなみに元の世界で猫を飼っているが元気にやっているだろうか心配だ。我が家の猫も妹が拾ってきたのである。名前はペロという。ペロも妹が名づけた名前前で有名な物語の主人公だ。ナミはペットを名付ける時に名前をよく引用する癖があることに今更気付いた。

アマルフィを自分で頭の上に乗せた妹はくるくと回って遊ぶ。椅子に腰掛け、戯れている一人と一匹を見ていると家でペロと遊んでいた妹を思い出して落ち着いてくる。

この世界に来てからもう二週間が経過したが進展は一切ないのが現実だ。バベルの塔という脱出方法があるとしても所詮それは伝説や作り話程度で存在する信憑性はない。希望としてそれが存在するということを願うのも一つの方法だけれど選択肢は多い方がいい。だから俺は他の方法を探すために毎日のようにエリュシオンに赴いているのだが残念ながら情報は見つかっていない。

時間の経過というのは残酷だ。何をしても何もしなくても時は進むのを止めない。

この国では隣国であるアンジールとの戦争が起きている。俺達が

いる城とその周辺は安全とはいえないが平和を維持している。この周辺はまだ戦争の業火が届いていないだけで国境付近では毎日のように人が人を殺し続けている。

アイナは毎日のように対策や兵の配給に頭を悩ませている。日が経つにつれて表情は影を作っていくのが分かるほどに追い詰められていた。それでも彼女は必死にこの国を守ろうとしている。

毎日忙しいはずで修練もやっている時間はないはずだが毎日兵を指導している。たとえ戦場を駆け廻り疲れ果て帰還した日もその次の日も彼女は日課を休まない。俺がこの世界に来た次の日も兵を指導していたように。

俺はアイナに、無理はしないで休めばどうか、と尋ねたが彼女は「歩みを止めては追いつかれてしまうのです」とさらりと言った。

歩みを止めては追いつかれる。

その言葉にはいくら俺が鈍いとしても様々な意味があると言われた瞬間に気付いた。でもその言葉にアイナがどんな意味を含ませているのかは分からない。

彼女は常に前を向いて歩いている。それに追い詰められても目の前の壁を打ち砕いて突き進むだろう。いや、現在の彼女がそうなのだから。

俺は無駄で意味のない気休めを彼女に言ってしまったことを後悔した。人を思った風を装ったような偽善の態度だ。彼女が休むことができないことを心のどこかで思っていたのに俺は他人を気遣うフリをしていた。

俺がもし同じ状況で同じことを言われたなら色をなすだろう。知った風なことを言うなと腹を立てるに違いない。

「救世主様、お時間よろしいでしょうか？」

ドアをノックされる音の後にアイナの声が聞こえてきた。ナミはアマルフィを頭に乗せたまま「はい」と言っただけでドアを開けた。

ドアが開かれ部屋に入ろうとしたアイナはいつもの銀の軽装で綺麗な容姿だったがナミの頭の上を見て固まり驚愕といえるような似合わない表情をした。女の子の頭の上にドラゴンが乗っているのだから当然の反応だ。

「これ・・・は、どういうことですか」

これとはアマルフィのことだろう。この世界ではそこまで驚くようなものなのか。もちろん元の世界でドラゴンなんて現れたら地球を揺るがす程のニュースになるだろうけど。

「アマルフィっていうの」

ナミはアマルフィの喉を撫でながら呑気に他己紹介をした。アイナは眉間に皺を寄せて今の状況を整理しているみたいだった。

「それはドラゴンですよ。その、危険はないのですか？」

「大丈夫だよ、ほら」

ナミは頭の上の翼の生えたトカゲを掴みアイナに見せる。アイナは近づけられた瞬間ビクツと体を震わせて恐る恐るアマルフィを覗きこんだ。

ドラゴンに対して恐怖を持っているみたいだ。アマルフィは「きゅい！！ きゅう！！」と鳴くとアイナはもう一度体を一瞬だけ震わせた。

「どうしたの？ この子は何もしないよ」

「そうですね、流石は救世主様です。まさかドラゴンを眷属に

する人間がいるとは思わなかったものですから」

「ドラゴンってそんなに危険なのか？」

「ええ、人間では太刀打ちできませんから。稀にドラゴンに打ち勝つ者がいますがそれは殺すのが精一杯で眷属にする余裕はありません。それにこんな小さなドラゴンがいることも思わなかったことなので」

アイナはちょんちょんとアマルフィの頭に触れる。いつものアイナと違いかわいい仕草だとにやけてしまう。

「それでさ、ドラゴンを飼っていいかな？」

「それは構いません。むしろお願いしたいくらいです。救世主様は私の思う次元と全く別の存在だと再認識しました」

勝手にアイナの中で俺達が天上遙遠くに格上げされたみたいだ。別次元というか別世界の存在だしね。人が勝手に俺達を持ち上げるのにも慣れてしまった今日この頃。

嫌な気分ではないけれど本当の俺達を知った時にこの人達はどこまで俺達を格下げするのだろうかが恐いところだ。

「救世主様。重要なお話があっってお部屋にお邪魔しました」

急にアイナが平静を取り戻し普段の凜とした表情に戻っていた。

俺とナミとアマルフィはアイナの真剣な顔に注目した。

「明後日暁の時に出陣が決まりました。そこで救世主様も共にと」

出陣ということは戦争に行くということ。戦場に救世主として地を踏むことだ。

戦争が遠い存在ではなく身近な存在へと変わる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2831t/>

麗しき心ない世界

2011年6月20日01時59分発行